



メイラン『日本』 標題紙



「葬儀」(メイラン『日本』173頁)



「鬼退治」(メイラン『日本』81頁)

G. F. メイラン『日本』1830年刊所収

Germain Felix Meijlan, *Japan*.

Amsterdam: M. Westerman & zoon, 1830.

1826年に日本へ渡り、1830年まで長崎オランダ商館長を務めたオランダの高級官僚メイランは日本関連の著書を二冊残している。一冊は日欧貿易史について著されたものであり、メイランの死後、1833年に出版された。もう一冊は『日本』であり、その標題紙と図版が本誌の口絵を飾っている。同書は190頁から成る本で、メイランが長崎に滞在中に見聞した日本の文化・社会についての事柄を概略的に記述したものである。扱われているテーマとして、政治、宗教、衣服、階級制度、行事、暦法、国語、美術、芸術などがあり、特に長崎の町についての記述が多い。同書には図版が二枚しかない。その内の一枚、「葬儀」の図版は「日本人の生涯に起こる特記すべき行事」の章に挿入されている。同章の中でメイランは誕生、結婚、葬儀を取り上げ、詳細に記述している。もう一枚の図版「鬼退治」は節分の豆まきの様子が描かれ、「日本の宗教」の章の中で迷信の一例として挙げられている。それについて、メイランは本文で次のように書いている。「彼等は一般的に鬼の存在を信じており、毎年それを家から退治することが祭りの一つである」。メイランの文体は明晰で、日本文化の真髄を分かりやすく伝えている。同書は日文研貴重書データベースに収録されていて、オンラインで閲覧することができる。

(解説：フレデリック・クレインス)